

こちら危機管理課お天気相談所

～気象防災アドバイザーによるすぐに役立つ気象情報を月1で配信～

※気象防災アドバイザーとは「地域の気象に精通し、地方公共団体の防災対応を支援することができる人材」として気象庁が委嘱した方です。

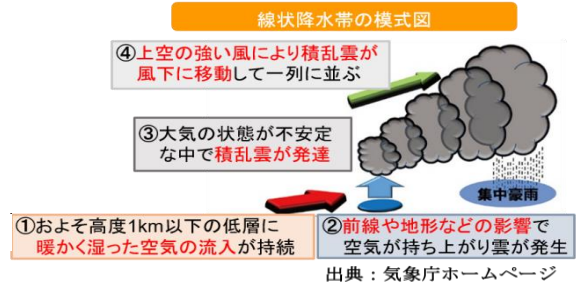


Yoshiaki Yano

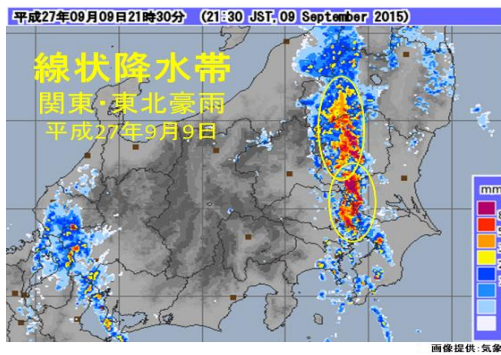
もし、“線状降水帯”がもっと西にあったなら・・・

”線状降水帯”という言葉をご存じでしょうか？ 近年、豪雨災害を引き起こす原因としてニュースなどでも取り上げられることもあり、ご存じの方々も増えているように感じています。

一つの積乱雲は、寿命がおよそ30分から1時間で、数十ミリの雨を降らせます。これが風に流され通過していくと、“激しい通り雨”で済むのですが、次々と発生しては流されていくと、積乱雲がほぼ線状に列をなし“線状降水帯”を形成します。地上では長時間にわたり雨が降り続け、数百ミリの集中豪雨となります。



2015年9月9～10日、非常に湿った南東風により、左図のように関東地方から東北地方にかけて南北に延びる線状降水帯が、ほぼ同じ所に次々と発生、13個にもなりました。豪雨の最盛期にあたる夕方から朝方にかけては、東西100～200km、南北500kmの長大な線状降水帯が形成されました。栃木県内では48時間雨量600ミリ以上、9月の平均雨量の2倍に相当する豪雨になるなど、関東・東北地方の多くの河川で溢れたり決壊したりして、1000棟を超える家屋が床上・床下浸水しました。この豪雨は「平成27年9月関東・東北豪雨」と命名されています。



線状降水帯にほぼ沿って流れていた鬼怒川の水位は急速に上昇、常総市では堤防が決壊するなどして、市の面積の3分の1にあたる約40km²（葛飾区の面積は約35km²）が浸水してしまいました。常総市役所では1階部分が浸水、業務の機能が喪失しています。

もし、線状降水帯の位置がもう少し西に位置し、荒川や利根川の上流域にあたる埼玉県や群馬県であったなら、葛飾区周辺に流れ下った水は堤防を超えたり破堤したりして“外水氾濫”を起こしていたかもしれません。

葛飾区内の“外水氾濫”は、遠く離れたところの豪雨によるもの、一方、雨水の排水が追い付かない“内水氾濫”は、葛飾区付近で発生した線状降水帯などによるもの、と再認識したいと思います。

気象庁は昨年6月から、線状降水帯による激しい雨が同じ場所で降り続いたとき、「線状降水帯」というキーワードを用いて注意を喚起する気象情報を発表しています。また今年6月1日からは、線状降水帯による大雨の可能性が高いことが予想された場合、半日程度前から、気象情報で呼びかけを開始しました。ただ、呼びかけの精度はまだ皆様の期待に応えられる精度ではないかも知れませんが、3時間150ミリ以上の大雨になる確率は、地方単位でみると約6割と見積もられています。この発表は報道などを通して伝えられますので、皆様と共に大雨の心構え・危機感を一段と高めていきたいと思ひます。